

第 5 章

教育相談事例

学校において個別の教育相談の充実を図るためには、教師がカウンセリングマインドをもって児童生徒にかかわり、多面的・客観的な児童生徒理解を行うことが大事である。その上で、当該児童生徒に対する指導・援助の方針を決定し、具体的援助を推進していく必要がある。また、その効果をより一層高めていくためにも保護者や関係機関との連携が欠かせない。

このような児童生徒理解や援助方針の決定と具体的援助、家庭・相談機関等との連携などが詳しく示された事例を次に紹介する。

事例 1 「ソーシャルスキルの獲得で対人不安を軽減した A 男」(小学 5 年生)

事例 2 「関係機関との行動連携による対応で心の安定を取り戻した B 子」(中学 1 年生)

事例 3 「いじめへの早期対応で保健室登校を経て教室復帰した C 子」(高校 2 年生)

* 各事例については、個人情報保護の観点から個人が特定されないように配慮してある。

事例1「ソーシャルスキルの獲得で対人不安を軽減したA男」(小学5年生)



おとなしく、自分の思っていることをはっきり言えないA男は、いつも友達の言うままに行動することが多かった。2学期から月曜日に学校を休むようになり、10月からほとんど登校しなくなった。これまでも何度か学校を休むことはあったが、長期にわたり休むのは初めてだった。

A男と保護者は、担任の紹介で11月から当センターに来所を始めた。A男は、相談場面でもほとんど言語的なコミュニケーションができなかったが、ソーシャルスキルを身に付けることができるように支援したことで、対人関係の取り方やそれに伴う不安を軽減することができるようになった。

担任は、本人との関係が途切れないように、初めは1週間に1回の割合で家庭訪問をして、話し相手になった。やがて、1週間に2～3回家庭訪問をしたり、放課後の学校に誘ったりして、学習の補充指導も行った。新学年度から再登校ができるように、春休みも友達と一緒に活動できる場を設定した。A男は6年生になって不安を感じながらも、ほとんど休まず登校するようになった。

児童理解

A男は、学級内のリーダー的存在の児童をととても気にしており、自分の意見をはっきり言えないことを残念だと思っていた。在籍校で対人関係を改善できない自分自身にいらだちを募らせ、現状打開のためには転校しかないと考えていた。両親もA男の気持ちを受容し、場合によっては転校も考えた方がいいのかと迷っている状況であった。

A男は、家では大きな声で話したり、家事の手伝いをしたり、弟と一緒にゲームをしたりすることができた。歌を歌うことが大好きで、テレビの歌番組を観て弟と一緒に歌ったりすることが多いようであった。

スポーツにはそれほど自信をもっておらず、地域の行事等に誘われると参加するが、自ら友達を誘って一緒に運動することは少ないようであった。

指導・援助の方針

(セ)は当センター、(学)は学校、(家)は家庭での支援・助言を示す。

- 1 担当者との信頼関係を深めることで、対人不安を和らげる。(セ)
- 2 基本的なソーシャルスキルを習得できるようにする。(セ)
- 3 定期的に担任が家庭訪問をしたり、学校への誘い出しを行ったりして、教師や学校に対する不安を軽減する。(学)
- 4 将来の夢をはぐくむために、自分のよさに気付かせる活動を行う。学級への誘い掛けをする。(学)
- 5 地域の子ども会活動や行事に積極的に参加するように促し、異年齢集団での体験活動を通して、人とかかわることの楽しさに気付かせる。(家)

指導・援助の経過

1 児童理解

A男は、不登校の原因を自ら語ることはほとんどなかった。学校生活等の状況から保護者が推測した理由が、対人関係上のトラブルではないかということであった。

当センターへの初めての来所時も担当者との会話はほとんどできなかった。担当者は、A男にうなずいたり首を横に振ったりして、質問に答えてもよいことを伝えて、質問をした。

その中で同級生とうまくいかないこと、学校には行きたくないこと、転校したいと思っていることなどが確認できた。より詳しい内容を把握していくために、今後の相談で*エゴグラムや*SCTなどを実施することが必要であると考えた。

2 かかわりの視点の明確化

エゴグラムを実施した結果、CP（厳格性）、A（客観性）がやや低い傾向、AC（順応性）が高い傾向にあり、自分の意見を言うよりも他の意見に従うことが多いことが予想された。

SCTでも、自分がおとなしいこと、友達から頼み事をされること、頼まれた事が嫌でもそれを断れないことなどが回答してあり、対人的なかかわり方に課題を抱えていることが分かった。

そこで、来所時の活動に*ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、友達から誘われたり、頼まれたりしたときにどのように答えたらいいのか具体的な*ロールプレイングを通して学ばせることが必要であると考えた。

また、運動が苦手なA男でも、気軽に取り組むことができる運動として卓球を取り入れていくことにした。

ポイント

不登校に限らず当センターに来所する児童生徒は、言語的なコミュニケーションが十分にできないこともあり、情報収集の方法を工夫する必要がある。

*エゴグラム

交流分析理論に基づいて開発された性格テストの一種。交流分析では、人の性格は、これまでにかかわりのあった様々な人の影響を受けており、親や養育者から取り入れた自我状態（CP、NP）、事実に基づき物事を客観的かつ論理的に理解し、判断しようとする自我状態（A）、子どもの頃に実際に感じたり、行動したりした自我状態（FC、AC）に分けて性格を分析する。（研究紀要第92号で詳しく紹介している。）

*SCT（文章完成テスト）

短い刺激語の後に自分の思っていることを続けて書いていくもので、文章の中に投影された本人の悩みや不安、願望、気持ちなどを分析する。

不登校の児童生徒の多くが対人関係の課題を抱えている。いじめを受けたり、仲の良かった友達とけんかをしたりして思っていることを言えずに不満が募っていることがある。対人関係の改善を図るスキルを身に付けることによって対人関係上の自己効力感を高めることにつながる。

*ソーシャルスキルトレーニング

対人関係を円滑に進める上で必要となる社会的なスキルを意図的、計画的に学習できるようにしたものである。

*ロールプレイング

役割演技を通して演じた役割の気持ちを理解したり、スキルを修得したりするためのカウンセリングの技法の一つである。

3 ソーシャルスキルトレーニングの実際

A男は、担当者との相談場面では、自ら声を出して話すことが少なかったため、ロールプレイングでも声を出して役割を演じることができるか気掛かりであった。しかし、予想外に積極的なロールプレイングが見られた。

担当者が、最初にモデルを示し、どのような話し方をすると相手にしっかり自分の気持ちを伝え、しかも相手へも配慮した答え方になるかを学習した。その後、A男自身がモデルの示した答え方をまねた。何度か繰り返すうちに声の大きさや内容も明確になった。

ロールプレイングの場面設定を「遊びに誘う」、「誘いを断る」、「頼み事をする」、「頼まれ事を断る」など様々なパターンで行った。場所も相談室内だけの活動にとどまらず、プレイルームや屋外でも実施したり、担当者以外の所員等も行ったりして様々な場面で応用できるようにした。

卓球は、ある程度ラリーを続けられるようになってからスマッシュの練習を取り入れた。スマッシュが入るたびに笑顔が見え始め、ゲームもできるようになった。そのころから、家族でも休日に体育館で卓球をするようになり、家族の中で一番上手になったことを自分からうれしそうに話すようになった。

4 担任のかかわり

担任は1週間に2～3回程度家庭訪問をしてA男と直接話をしたり、学習指導をしたりしていた。A男も担任の訪問を心待ちにしている様子であった。担任は、地域のドッジボール大会に学級全員で出場して友達関係の改善の機会にしたいと考え、A男と比較的仲の良い子を通して参加を促したが、A男はまだ参加できる状況にないことを担任に伝えた。

このことから、無理に友達と活動させること

ソーシャルスキルトレーニングでは、モデルの示す言動が学習者に大きな影響を与える。したがって、モデル役は事前にどのようなことに気を付けて演じればよいか、演じる際のポイントをしっかり把握しておく必要がある。

指導者は、モデルの演技の中で、体の向きや視線、声の大きさ、表情などの態度面のポイントや会話の中での気持ちの伝え方のポイントなどを具体的に示すことが大事である。

モデルを見て「自分もやればできそうだ」という自己効力感を高め、自分たちで実際に演じてみて、よかったところを相互に認め合うことで実践意欲を高めていくことができる。



不登校の児童生徒へのかかわりで特に保護者等が不満をもちやすいのが、学校との連携が十分に図られないことである。学級通信や学校便りなどの配布物が届かなかったり、PTA等の行事案内がなかったり、電話や家庭訪問などがなかったりすると、児童生徒本人や保護者の学校や担任に対する信頼を損なってしまうことになる。

A男の場合は、担任がA男や保護者の状況を把握し、家庭訪問というニーズにしっかり対応していることが大事な点である。

は時期的に早いと考えた担任は、しばらくは担任中心のかかわりが必要と判断し、放課後の学校へA男を誘った。A男は戸惑いを見せながらも、同級生のいない学校へ行くことができた。それ以後、放課後の教室で数回学習指導を受けることができた。担任の誠実な取組はA男や保護者の信頼を厚くした。

5 学校と当センターの連携

保護者には当センターでの活動等を学校にも伝えてほしいこと、必要に応じて直接学校からも教育センターに連絡をとることができることを説明し、理解を得た。

3月に入って校長は当センターを直接訪問し、当センターにおけるこれまでのA男の状況等について確認するとともに、今後の学校の対応方針を説明した。担当者は、A男や保護者のニーズを十分踏まえた上で、4月からの担任への配慮、学級での人間関係づくりやソーシャルスキルトレーニングなどの計画的な実施等が大事であることを助言した。

この際、訪問の頻度等はそれぞれのケースによって異なると思われるが、仮に児童生徒と会えなくても保護者とだけは会ったり、話をしたりして情報交換を綿密に行うことが大事である。

相談機関等に保護者が相談に行った場合、保護者自身が相談機関等での助言を学校に伝えることで学校と保護者の相互の連携が図られ、児童生徒の問題等の改善に効果を発揮することが多い。また、保護者の了解を得て、学校と相談機関がプライバシーに配慮しながら直接連携し、児童生徒へのより適切な対応ができるようにすることも大事である。

保護者が、相談機関等に行くことに抵抗がある場合は、学校関係者が相談機関等に来所または電話による相談をすることも可能である。本事例では、学校と当センターの適切な連携によって、A男の状況に応じた実践が不登校の改善につながったと考えられる。

A男の変容

- 1 対人関係上の課題解決の方法として、ソーシャルスキルトレーニングのロールプレイングを通して自分の思っていることをはっきりと伝えることができるようになった。
- 2 担任の家庭訪問での指導、放課後の学校での指導などをしっかりと受けることができるようになった。
- 3 卓球の技能が向上しただけではなく、休日には家族で卓球を楽しんだりするようになった。

その後の対応

- 1 担任は、春休み中の対応の重要性を感じ、比較的仲の良い友達にA男を誘って学校に来るように促した。
- 2 学校は新学年もこれまでの担任がかかわれるように配慮し、学校行事、学級活動など様々な活動を通して人間関係づくり等の活動を計画的に行った。
- 3 5月の修学旅行でA男が積極的に活動できるようにグループ編成等の配慮をした。

事例2 「関係機関等との行動連携による対応で心の安定を取り戻したB子」(中学1年生)



B子は、小学6年生の2学期から、友人関係のトラブルをきっかけに登校渋りが見られるようになり、遅刻や欠席が多くなった。さらに、中学1年生の5月ごろから不登校状態になったため、母親が学校に相談し、担任がその対応に向け当センターとの連携を開始した。

その後、6月に父親に夜間徘徊のことで注意を受けたB子が家を飛び出し、翌日になっても帰って来なかったため、母親は担任に連絡するとともに警察に捜索願を出した。このことを受け、学校から報告を受けた町教育委員会は、教育事務所に報告して助言を受けるとともに、一刻も早い保護に向け警察と連携を図った。

翌々日の朝、B子は、隣町のコンビニエンスストア駐車場で警察に無事保護された。このことを受け学校からの要請で、学校、町教育委員会、児童委員(民生委員)、警察の関係者が集まって今後の対応についての協議を行い、B子及び家庭への支援計画を立てた。また、保護者は警察から今回のB子のケースにおける危険性や家出により派生する様々な事件や事故についての説明を受けた。

その後、町教育委員会は、児童委員と連携し、B子の両親に働き掛け、B子の心の安定に向けての助言を行った。また、B子と母親は、学校の勧めで7月から当センターに来所を始めた。相談を継続するうちに、B子に対する母親のかかわり方や家庭環境にも改善が見られ、B子は心の安定を取り戻し、9月から保健室登校ができるようになった。

生徒理解

B子は、友達が多く社交的なところがあったが、小学6年生時の友人関係のトラブルをきっかけに自信を失い、学校への忌避感情をもつようになったのではないと思われる。

また、B子は、両親と過ごす時間が少なく愛情不足の中で寂しさを募らせたり、妹への母親の寛大な態度から妹だけに母親の愛情が向けられているように感じたりして、日常的にストレスを蓄積していたと思われる。

このような心理的に不安定な状態の中で、母親に自分のことを認めてほしい、振り向いてほしいという思い、また、今の自分は自ら望んでいる自分ではないという思いから不登校になったととらえられる。しかも、不登校となった自分が母親から日常的に責められるという状況の中で、次第に追い詰められ、母親に対しても反抗的な態度をとるようになり、偶発的な父親の叱責を機に、家庭からの逃避行動に至ったと考えられる。

指導・援助の方針

(セ)は当センター、(学)は学校、(警)は警察、(児)は児童委員(民生委員)、(町)は町教育委員会の支援・助言を示す。

- 1 カウンセリングによりB子の情緒を安定させ、保護者への助言を行うとともに、B子の状態に応じたかかわり方について、コンサルテーションを行っている。(セ)
- 2 学校の要請を受けて警察や児童委員などとサポートチームを組織し、連絡・調整を図りながら、行政側からB子と保護者への指導・援助をする。(町)
- 3 主として保護者に働き掛け、家庭環境の改善に向けて援助する。(児)
- 4 B子の状況に応じて、学校及び町教委と連携し、事故の未然防止に向け支援する。(警)
- 5 各関係機関と連携しながら、B子の再登校に向けたかかわりを継続する。(学)
- 6 養護教諭を窓口し、居場所を確保し、校内サポートチームを組織して対応策を検討し、学級への誘い掛けをする。(学)

指導・援助の経過

1 学校と当センターの行動連携

当初、当センターの担当者は、学校の要請にこたえ、担任や養護教諭へのコンサルテーションを行った。また、B子が来所するようになってからは、保護者に了解を得て、担当者と担任が連絡を取り、当センターでの様子や、家庭訪問での様子、B子の心の状態についての情報を交換した。

また、母親を中心とした家庭への働き掛けも望ましい方向で進み、B子は心の安定を取り戻し、2学期からの保健室登校へとつながっていった。

2 B子との信頼関係づくり

友人関係のトラブル及び家庭での親子関係による人間関係への自信喪失という経過を配慮して、当センターでは、担当者とB子が十分信頼関係で結ばれるよう以下のように配慮した。

プレイルームでの活動には、B子自身あまり関心を示さなかったが、気軽に組みこめる卓球を提案して活動を開始した。最初は、動きもぎこちなく表情も硬かったが、次第に打ち解け、ラリーが続くようになると、うまく打てたときの喜びやラリーが中断したときの悔しさを表情に表すようになってきた。その後、ラリーの回数に目標をもたせ、互いに協力して打ち合う中で、自然と信頼関係の芽が形づくられていった。

3 母親への助言

当センターでは、母親にも個別に面談を行い、助言を行った。母親は、父親への不満、自らの仕事の辛さなど、苦しい胸の内を語っているうちに、心も次第に整理され、B子の今置かれている状況や心情へと目が向くようになってきた。そのことを共感的に受け入れながら、今後どのようにB子と家庭で接し、支えていけばよいのかを考えるよう促した。

ポイント

当センターは、悩みを抱える児童生徒や保護者から相談を受けるだけでなく、様々なケースに直面している学校に対してコンサルテーションも行っている。

学校からの相談要請により来所相談が始まった事例であっても、基本的には当該児童生徒や保護者が、当センターでの活動や支援内容などについて、学校に直接話すように促している。事例によっては、児童生徒や保護者の了解を得た上で、当センターが学校と連携を図ることもある。

不登校になっている児童生徒は、人目を極端に気にしたり、人と会うことにストレスを感じたりするなど、対人関係に自信を失っていることが多い。そこで、あいさつを交わしたり、質問に答えたりするような対人場面での成功体験を通して、自己効力感を実感できるようにさせることが大切である。

B子についても、担当者との活動を通して、相互の信頼関係が築けたという成功体験で対人関係における自己効力感を実感させることができた。



児童生徒の不登校を頭では理解していても、それを受け入れられない保護者は多い。そのため、登校を強要したり、厳しく叱責したりすることで、ますます親子関係が崩れることもある。

また、保護者は、学校からの登校に向

その後、母親は夜勤中心の仕事から昼間の仕事に転職し、学校から帰宅したB子をお帰りのように迎えられるようになった。

4 母親との関係の改善

B子は担当者との信頼関係が深まってくると、徐々に、両親に対する不満を漏らし始めた。母親に対しては、「お母さんは、いつもがみがみ怒っているばかりで私の気持ちなんか何も分かってくれない」、「妹には、いつも優しくて家の仕事も私だけに押しつける」など、これまで言えなかったことを言い始めた。また、父親に対しても、「私がこんなに苦しんでいるのに、何も助けてくれない」、「その時の気分で態度が変わるし、信頼できない」などと話し、家庭での孤立感を訴えた。

担当者は、B子の思いを共感的態度で聴き、感情をすべて出させるとともに、家族との楽しかった思い出を想起させるように促した。B子は、次第に家族とのプラスイメージを膨らませ、母親の苦しみにも目を向け始めた。



5 その他の関係機関等との行動連携

(1) 市町村教育委員会の役割

各関係機関が行動連携を行う場合には、それぞれの役割分担や情報交換の在り方についての共通理解が必要である。しかし、行動連携の必要性を認識していても、実際には動きにくいという現状がある。

今回のケースは学校の要請により、市町村教育委員会がコーディネーターとして、積極的に警察をはじめとする各関係機関に働き掛け、サポート体制を整えたことで早期対応ができた。

(2) 児童委員との連携

児童委員は、地域とのつながりが強く、家庭

けた家庭へのアプローチや地域の目などから、大きなストレスを感じていることが多く、子どものことを自分自身のストレスとして抱え込み、処理しきれないでいる場合もある。B子の母親も担当者がカウンセリングを行うことにより、ようやくB子の内面に目を向け始め、落ち着きを取り戻していった。

第三者が、児童生徒の親に対する不満をありのままに聴くことで、児童生徒は冷静に親子関係を見つめられる場合がある。

本ケースでは、担当者がB子の話を否定せずに受け入れながら聴くことで、B子も感情を吐露させ、ストレスの発散を促すことができたと考えられる。

このような過程の中で、B子が心理的に安定したことが、この後の母親との関係改善につながっていった。ただし、このような心理的安定が、すぐに児童生徒の再登校へとつながるわけではないことを十分理解しておくことが大事である。

不登校の状況は様々であり、学校だけでは対応できない場合や関係機関等と連携が必要な場合も多い。

その際、関係機関等の業務内容、連携方法などを校長、教頭、担任などが理解していることが重要である。ただし、B子のケースにおいては、学校の要請に応じ、町教育委員会がコーディネーター役としてサポート体制を整えていた。したがって、学校と行政の日ごろからの連携が、危機管理の上から重要な意味をもつといえる。

学校が、関係機関等と連携する場合、

へのかかわりにおいて、学校とは違った方向からの支援を期待できる。また、児童委員は公民館長、PTA会長、市町村福祉行政関係とのつながりもあるため、状況に応じた行動連携も期待できる。今回のケースでは、児童委員が日ごろから家庭訪問するなど信頼関係を築いていたため、父親に対して有効な支援を行うことができた。また、母親の転職に際しても、相談役として支援を行った。

(3) 警察との連携

児童生徒が、家出等の問題行動を起こした場合、警察の協力を得ることは非常に大切である。

今回のケースについても、B子を保護した際のかかわりによる効果は大きく、また保護者への対応も適切であり、今後のB子への支援についても大きな役割を担っている。また、警察には少年サポートセンターが設置されており、気軽に青少年の非行等の問題を相談できるので、学校の重要な連携機関となっている。

児童生徒の現在の状況や環境、対応の経過などを具体的に把握し、適切なアセスメント（見立て）が必要である。このアセスメントに基づいた具体的な対応方法により、児童生徒や保護者に対するより適切な支援が可能となる。

行動連携の中で、学校は関係機関等に一方的に依存せず、常に情報交換をしながら、関係機関と一緒に児童生徒や保護者を支援する必要がある。

関係機関等との行動連携が機動的・実効的に機能するためには、サポートチームが、日ごろから児童生徒の健全育成や不登校の状況について、緊密な情報交換や連携・交流を積極的に行っていることが大事である。

また、その日常的なつながりや交流が地域のネットワークとなる。児童生徒の育ちを社会全体の問題としてとらえ、それぞれの機関が自らの役割を果たしつつ一体となって取り組む「行動連携」が必要である。

B子の変容

- 1 最初の来所では、帰る時に母親を残し、自分だけ先を歩いていく様子が見られたが、来所回数を重ねるにしたがって、母親を待ち二人肩を並べて帰るようになった。
- 2 来所も終わりの段階に近づくと、面接の際の話題が、次第に家庭から学校へと移り、意識が学校に向き出した。
- 3 母親が、車で学校に送ることで、保健室登校を始めることができた。教室での学習は、まだできなかったが、学校行事には、養護教諭に付き添われながら参加できるようになった。

その後の対応

- 1 B子への対応については、全職員の共通理解を継続的にもち、校内支援体制を整えた。
- 2 保健室登校については、当センターの担当者と担任及び養護教諭が連携し、B子の状態と学級の状態を確認しながら、教室復帰に向けての適切な時期について十分検討した。
- 3 保健室では、他の生徒が入室するとB子が気を使うことがあったため、保健室以外のB子の居場所について、校内の空いたスペースを探し、環境を整えて対応した。
- 4 当センターは、継続的に母親との電話相談を行うとともに、父親との来所相談も行った。

事例3 「いじめへの早期対応で保健室登校を経て教室復帰したC子」(高校2年生)



成績が良く、部活動や生徒会活動など、何事にも頑張り屋のC子は、高校入学後から2年生の9月までは、友達グループの3人と仲良く過ごしていた。

10月下旬の文化祭のころから元気を無くしたC子は、11月になり学校を休むようになった。担任が家庭訪問や電話連絡を通して、C子の休みの理由を確認したところ、友達から無視されたり、悪口を言われたりして学校に行くことが辛い状況であることが分かった。そこで、担任はC子を含め関係者を一堂に集めて事実関係を確認して指導したが、その後もC子は欠席を続けた。

担任は、現状打開のために当センターでの相談を母親に勧めた。本人と母親は、来所相談を数回継続するうちに、心の内を担当の相談員に少しずつ話すようになった。C子は、文化祭の準備の際、「自分がしっかりやらねば。」という思いが強すぎ、クラスメイトに練習や準備をもっと真剣にするように言い過ぎてしまった。友達は、C子に反感をもつようになり、それ以降、学校の休み時間や昼食時間にC子を避けたり、無視したりするようになった。時には、友達から「いい子ぶりっ子」、「バカ」などの言葉によるいじめを受けるようになった。

また、C子は、病気がちな母親の代わりに家事を手伝い、勉強と家事で疲れ気味だった。

このことから、家庭と学校(担任、養護教諭)、当センターが連携を図りながら、C子への支援、いじめ解消のための取組を進めた。その結果、3週間の欠席、約1か月間の保健室登校を経て教室で授業が受けられるようになった。

生徒理解

C子は、活発で、成績も良く、課題等も提出期限をきちんと守る学習意欲のある生徒であった。また、学校行事や生徒会活動などでもリーダーシップを発揮するなど、教師からの信頼も厚かった。将来は、デザイン関係の仕事に就きたいという目標を立てていた。C子は、強い自尊感情や責任感をもっている反面、友達の自分に対する言葉や自分への評価などに敏感に反応したり、非難されると感情的に反論したりする一面も見られた。

C子は、だれとでも話はするが、3人の友達以外には深くつきあう友達がいなかった。そのため、3人の友達から無視されるようになったC子は、自尊心を深く傷つけられ、人を信じることができなくなってしまったと考えられる。

さらに、病気がちの母親には、「心配をさせたくない」と無理をしてでも家事をきちんとこなすことに努め、学校では、「弱い自分を知られたくない」との思いから、担任にも悩みを打ち明けることができず、不登校になってしまったと思われる。

指導・援助の方針

- (セ)は当センター、(学)は学校、(家)は家庭の支援・助言を示す。
- 1 C子の内面の理解を深めるため、自由に何でも話せる関係づくりが必要と考え、受容・共感的なかかわりに努めた。(セ)
 - 2 C子の不安やストレス軽減のためには家庭との協力が必要であった。そのため、母親のC子への言葉掛けやかかわり方などについて具体的に母親にアドバイスした。(セ)
 - 3 母親のC子への優しい言葉掛けや弟の協力などにより、家庭内でC子の心理的、肉体的負担が軽減されるよう努めた。(家)
 - 4 学級への復帰のための保健室の利用及び養護教諭のかかわり方などについて、職員に説明を行い、C子への支援について共通理解を図った。(学)
 - 5 いじめにかかわっていた生徒への指導、また、学級内の他の生徒に対してもいじめについて考えさせた。また、C子を受け入れる環境整備といじめの根絶に向けて、学級では構成的グループエンカウンター等を取り入れた人間関係づくりの取組を行った。(学)

指導・援助の経過

1 信頼関係の確立

担任からの相談依頼を受けた当センターの担当者は、友達からのいじめにより、自信をなくしている経過を配慮し、C子との十分な信頼関係を築く努力をした。

面談の最初の段階で友達からのいじめの内容を聞くことはせず、小学校時代の自分、中学校時代の自分を振り返らせることで、話しやすい雰囲気づくりを心掛けた。C子は、担当者との信頼関係が深まるにつれ、次第に本音を語るようになった。クラスの中で無視し続けられたことや陰口を聞く度に、耐えられない寂しさ、悔しさを感じ、この現実が受け入れられなかったことを話した。

また、学校での指導の中でいじめた友達と一緒に指導されたことで、自分の本当の気持ちを話せなかったこと、表面的に和解した形で指導が終了したために、先生が見ていない場面でいじめが続いたことなどを素直に話した。

さらに、学校から疲れて帰って家事や勉強をするのは辛いことが多いと感じたが、病気がちの母親に心の内を話すことができなかったことも話した。

2 学校と当センター、職員間の連携

(1) 学校との連携

1回目の来所相談を終えた後、母親は担任に相談の内容や経過等を連絡した。

当センターは、母親やC子から学校への連絡の許可を得ていたため、学校に連絡し、C子の心の状態、いじめの実態などを伝え、いじめを繰り返す友達への対応、養護教諭のかわり方などについて助言した。

ポイント

いじめによる不登校に限らず、課題を抱えた児童生徒を支援していくには、その課題に対する正しい事実や本人の考え、認識を明らかにすることが必要である。そのためには、まず相談者との信頼関係を築くことが大切である。その信頼関係の中で、自分の素直な気持ちを正直に語れるようになる。

ここでは、C子の小学校時、中学校時の話を受容的、共感的に受け入れることで、来所相談に対する不安や抵抗の軽減を図っている。

いじめの指導においては、早期解決を図るために様々な取組が行われるが、いじめを受けている児童生徒といじめている児童生徒を一堂に集めて、その場で和解を図るような指導が行われがちである。

しかし、いじめを受けている児童生徒は、いじめている児童生徒がいる場面では本当のことを言えず、真相を解明できないことが多い。また、そのことによっていじめがエスカレートする場合もあるため、多面的に事実を確認し、内容に矛盾がないかを慎重に検討することが大事である。

相談の内容によっては、学校と連携を図りながら対応しなければならない事例が多い。相談内容の守秘義務もあるが、本事例では、いじめの早期解決のために、保護者に了解を得た上で、当センターと学校が連携して対応することにした。

(2) 担任のかかわり

担任は、C子へのいじめに中心的に関係した3人から別々に事情を聞いた。担任は、いじめを絶対に許さないという毅然とした態度と同時に、いじめをするようになった背景についてもじっくりと聴く姿勢で臨んだ。

D子は、以前からC子の態度に不満をもっていたが、C子のそつのない行動になかなか不満を言うことができず、これまでずっと我慢していたと話した。ただ、文化祭の準備期間中にみんなには準備や練習をしっかりとやっていたC子本人が、用事で早く帰ったことに納得せず、E子、F子らとC子の悪口を言い始めたとのことだった。

E子、F子は、D子の気持ちがよく分かり、最初のうちはC子をかわいそうだと思ったが、やがて、C子の身勝手さを非難するようになった。そして、無視や悪口を言うとそれを気にしてC子が不安そうにする姿を見るのが楽しくなりいじめを続けたと正直に話した。これらのことを受け、まずはクラスの女子生徒全員の個別相談を行い、いじめへの認識やC子の苦しみや悩みへの理解を求めた。

D子、E子、F子は、C子の悩みや家庭の状況（家事手伝い等）を初めて聞き、驚きと反省の言葉を次第に出すようになった。

(3) 担任との連携を生かした養護教諭のかかわり

C子はやがて保健室登校ができるようになった。C子は、養護教諭にこれまでの経過や自分の心の内を素直に話した。養護教諭は、担任と連携を図り、相互に情報交換をしてC子の理解を深めるようにした。そして、C子が保健室で安心して過ごせるようにC子の思いを共感的に受け入れた。また、落ち着きや意欲が現れ始めた後半は、担任と協力して友達との接し方や言葉の掛け方、交流の在り方などについて、C子

本事例では、いじめに中心的に関係した3人だけでなく、観衆や傍観者となっていた周囲の女子生徒や男子生徒についてもいじめについての認識の改善を図っている点が重要である。

「いじめ対策必携」(鹿児島県教育委員会)には、いじめた児童生徒や保護者、いじめられた児童生徒や保護者への対応などが詳しく示してあるので、参考にして対応することが大事である。

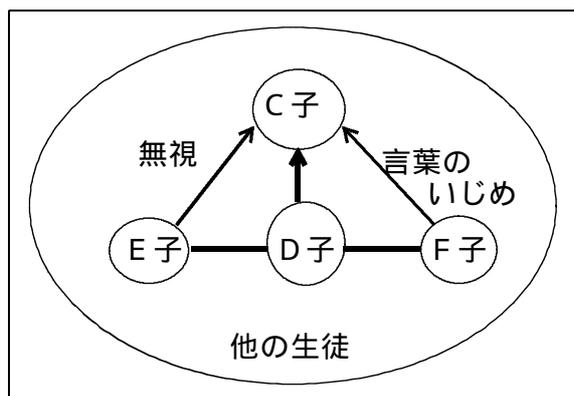


図40 本事例における人間関係相関図

養護教諭は、これまでも保健委員であるC子の相談に乗ったことがあり、C子の苦しい胸の内を共感的に理解することができた存在であった。その関係性を生かして、対応の初期においては養護教諭がキーパーソンとなった。そして、担任、教育相談係などと相談しながら保健室でのC子への対応を進めたことが、よい結果につながっている。サポートチームで活動する意味を共通理解し、当面誰が対応の中心であるべきか、事例に応じて柔軟に対応することが大事である。

のソーシャルスキルを高める支援を行った。

3 母親への協力依頼

母親との面談の中でC子の思いを母親に伝えた。母親は、これまで接してきた中で、C子がこれほど肉体的、精神的に疲れていたことに気が付かなかったこと、また、その余裕がなかったことを反省し、涙を流しながら悔やんだ。

担当者は、母親の苦しい状況等を理解し、共感的に受け止めながら、今後のC子との接し方で、優しい言葉掛けやあまり無理をさせないこと、学校と十分連携しながらかかわっていくことなどをアドバイスした。



C子の母親が、子どもの悩みに気付かなかった自分自身を責めているように、児童生徒の不登校や問題行動の原因を自分の子育ての失敗であると感じる保護者は多い。

したがって、保護者の苦しい状況を理解して共感的に受け止めることは、保護者との連携を図るための第一歩である。保護者を支援することで、保護者の子どもへのかかわり方の変容を促し、ひいては児童生徒の変容につながっていくことも多い。

学校と保護者が十分に連携を図りながら対応するためには、まず、学校での生活の様子を保護者に丁寧に連絡することが大事である。そうすることで、保護者からも家庭での生活の状況等をこまめに学校に報告してもらえるようになり、効果的な連携ができるようになる。

C子の変容

- 1 学校を休んでいる間は、生活のリズムを崩さないよう注意しながら、体を休めることを目標に家でゆっくりと過ごすことで、学校への意欲も出始め、3週間後には保健室への登校ができるようになった。
- 2 保健室登校の間、養護教諭のかかわりや教師の声掛け、友達との交流の回復などにより徐々に元気が出始め、表情にも明るさが戻ってきた。この様なかかわりを続け保健室登校1か月で教室に戻ることができた。
- 3 教室に戻った後は、友達とも以前と変わりなく過ごすことができた。

その後の対応

- 1 C子の学校での生活状況について、担任や教科担任、養護教諭などが特に注意しながら観察し、不安な点がみられたら、担任に情報が集められる体制を確立した。
- 2 家庭とは担任を通じて、C子の学校や家庭での様子について定期的に情報交換を（週に1回程度）行い、C子の変化に気を付けるようにした。